

天声人語

主人公の古倉恵子は一人暮らしの36歳。コンビニ店員の仕事に性に合い、駅前の店で18年も働く。大学を出た後もアルバイトとして週5日は通う▼就職や結婚、出産という「まともさ」

を押しつけてくる世の中と自分はズレている。コンビニは違う。同じ言葉、同じ態度で接客し、暑さ寒さにあった商品を手際よく販売できれば認めてくれる。自分らしく生きられる――。芥川賞に輝いた小説「コンビニ人間」である▼作者の村田沙耶香さんも36歳。大学時代にコンビニで働き始め、いまも週3回、店に出る。会見の言葉にもコンビニに寄せる思いがあふれた。「子ども時代から何をやっても不器用な自分が、コンビニではやっていけると気づいた」▼朝2時に起きて6時まで机に向かう。コンビニ勤務は午後1時まで。執筆に戻って夜9時に眠る。若手の旗手として三島由紀夫賞などを受けた後も辞めなかった。「空想の世界にこもるより、社会との接点があった方が小説が進む」。晴れて芥川賞作家となったが勤務は続けたいそうだ▼ことコンビニになると、かつては「食文化を乱す」「街の個性を奪う」と副作用にばかり目が行った。「千円からお預かりします」式のコンビニでよく聞く妙な語法は、いまなお耳にさわる▼とはいっても、コンビニに足を運ばない日はない。もはやコンビニなしの日本は想像しがたい。全国に5万数千店、毎月延べ14億人が訪れる。無数の「コンビニ人間」に支えられて回っている日本社会である。